

優秀賞

父から教えてもらったこと

指宿市立指宿商業高等学校3年 加治屋 ほか

私は未だに後悔し続けていることがある。それは、九年前に病気で亡くなった父に「ありがとう」の気持ちを、最期に伝えることが出来なかったことだ。

父は「白血病」という病気だった。血液がんの一種である。発症後、二年半に及ぶ闘病生活を送った。父はどんなに辛い抗がん剤治療や手術でも弱音を吐くことはなく、生きることを諦めなかった。それでも病気の進行は止まることなく、髪の毛は抜け、やせ細り、続けていた交換日記も出来なくなった。諦めずに治療し続けていたが、私が小学校三年生の時、家族や親戚の前で息を引き取った。その時、私は手を握り、ただ泣くことしかできなかった。その頃はまだ、「死」というものが理解できず、実感が湧かなかった。もう会うことも、話すこともできないという現実を知った時には、伝えたいことばかりであった。最期に泣くのではなく、感謝の気持ちを伝えれば良かった、と何度も後悔した。

このことから、感謝の気持ちを伝えられることの大切さを学んだ。人はいつ、何が起るかわからないと同時に、伝えたくても伝えられなくなる日が必ず訪れる。その時に後悔しないために、日頃から感謝の気持ちを伝えることはとても大切なことだと思う。

私は、十七歳になった今、友達や家族、つながりを持った人に「ありがとう」と言葉にして伝えることを心掛けている。恥ずかしいと感じる時は文字にして手紙で伝えている。父が亡くなってからも、週に一回父に手紙を書くようにしている。後悔を消すことは出来ないが、こうして伝えることの大切さや何事にも諦めないこと、命の大切さを教えてくれた。父は私の誇りであり、とても感謝している。父に教えてもらったことを生かし、伝えたい感謝の気持ちは言葉や文字にして必ず伝えるようにしたい。これからも「ありがとう」の言葉を大切に、自分の気持ちを伝えられる社会人になるために心掛けていきたい。